



## 障害を持つ幼児の保育(27)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

## 高いところへ登る子どもの問題

### 高いところへの憧れ

F 前回、子どもが幼いうちから高いところに憧れ、心(思い)を高く上げるということについて考えました。

M そう、どの子どもも高いところに憧れるのは分

かっていましたが赤ちゃんのときからだということをはつきりと気が付いたのは、最近孫と付き合うようになってからです。

『保育の体験と思索』に書きましたが、幼稚園の子どもから誘われて滑り台の上に登ってみたり、滑り台の下に作ったゴザのお座敷に寝たりすると、自分の中に

天と地が意識されますね。それは単に空間の知的認識だけでなく自分の精神世界に天の高さと地にある人間の低さを学んでいるように思いますよ。

F その話は大学の附属幼稚園で子どもと遊んだときのことですね。誰でも経験する保育の中の小さな出来事から大人自身の心が深められていくあの話は、私も共感しました。自分の低さから見るから余計懂れが強くなるのでしょうか。

M 愛育学園の子どもたちの中には高いところが特別好きな子どもがいますね。あの子も、この子もそうだったと次々に子どもの顔が思い浮かんできます。

高い木や遊具の上で風の自由さを感じたり、雲が形を変えて動くのを見たり、孤独を楽しんでいたりするのでしよう。

F でも、どんどん建物の上に登ってしまう子もいますね。

大人も登れないような高さのところに登る子ども

は、こわくないのでしょうか。

M 大抵の子どもはある程度の年齢になるとそんなに高くまで登らなくなります。子ども時代だけの出来事といえるでしょうが、子どもにはそれだけ高さに憧れる気持ちが大人も強いのだと思います。

子どもたちは高さに憧れる気持ちを言葉ではなく実際に登ることで示すのでしょうか。いままで落ちて怪我をした子は愛育ではありませんよ。でも、保育の中で子どもが高いところに登って落ちないようにすることは本当に神経を使います。

### 落下のイメージ

F 落ちるこわさは大人の方が強いのでしょうか。

M 落ちたその結果に対するこわさですね。

F 以前愛育学園の小さい子が、自分の家の二階のベランダから身を乗り出して、いくら注意しても足をかけて乗り越えようとするのだそうです。それで『そん

なことしたら落ちて死んじゃうよ』と強く叱ったという話を登園して来た母親から聞きました。ところが、その日この子が愛育でやった遊びは二階から一階に行く階段の上から下に向かって、両手を伸ばして泳ぐようにスルスル落ちるというか、滑り下りるような遊びでした。始めはなんだか分からなかったけれど、その場で見ていて何回も子どもが繰り返す様子からお母さんの言った『落ちる』ということを実感しようとしているのだと思いました。

M 私もそのお母さんが真剣に怒った『落ちたら死ぬ』ということ、つまり『落下のイメージ』と『大地の衝撃のイメージ』を体で感じようとしたのだとそのとき思いました。この子にとって言葉だけでは納得しきれないものがあるのでしょうか。

斜面を滑り降りることは、遊びの中でやるけれど、高いところから落ちることは絶対にやらせられない。だからといって禁止や規制ばかりでもない。

そこに保育の問題が出てくるのです。

### 保育の問題としての

#### 『落ちないように』ということ

F 幼稚園など何歳まではここまで登ってよい、というようなルールを作っているところもあります。しかし高いところに登ったときどんな注意をしたらよいか、どこに手や足をかけたら危険がないかを一人ひとり手伝って、その場で教えるといいですね。

M 子どもが落ちたり怪我をしないようにということとは真剣な問題ですが、それだけに心をとらわれていると、保育者が監視者になってしまいます。それでは子どもとの人間的な関係つまり保育的な関係は出来にくいでしょう。落ちないようにというか、登らないように見張らなければならないときもあります。そんなとき子どもの方が大人との距離を保ちながら大人の気持ちを試していることもあります。大人たちがみんな

で高いところが好きな子に気を配り、大人同士も支え合っているときは監視者にはならないのです。その反対に人手がなくて自分一人が見ていなければならぬときは、子どもがちよつとそちらに体を向けただけで身構えたり、そちらに走ったりしてしまいます。そんなときは保育者であることと、危険を回避する役割とのあいだでちつとも楽しめないのです。

F あるとき入園して間もない男の子が遊具のてっぺんに立っていました。その子の運動能力は分かりませんが、気が付いて何人かの保育者が下から見上げていました。みんな心配そうな表情なんです。子どもが上から見た大人の顔は心配と困惑の表情ばかりだと思つたことでしょう。そのとき一人の保育者がさつと登つて高いところにいるその子を小脇に抱えて降りて来ました。本当にびっくりしました。

M その場面は私も覚えていますが。誰もがその保育者の真似は出来ません。でもすごい。ここでは子どもの

危険を守るといふ保育の出発点が、子どもと体を触れ合わせるころから始まっている。そこから始まって子どもが自分から降りてくるというところにまでいくには、実に長い丹念な関わりが必要です。

いつも言うことだけれど子どもが下に降りてくると大人は安心してしまうけれど、それから本式の『保育』が始まるのですね。

### 子どもからの誘い

——大人が監視者ではなくなる

F 榎沢良彦さんの著書『生きられる保育空間——子どもと保育者の空間体験の解明——』（学文社 二〇〇四）の第3章に出てくる高いところに登る子どもと保育者である榎沢さんとの関係についての記録は同じ保育の場にいたものとして非常に面白かったです。

その女の子が屋根に登らないように見ているように先輩保育者から言われたとき、子どもにたいして保育

者ではなく監視者になってしまう。にこやかな表情を装いながら少しでも屋根に登りそうな素振りをする。即座に引き留めようとしている。そのことに「心苦しさ」を感じ、「居心地の悪さ」を感じている。子どもの方もそのことが分かかっていて警戒するような目つきで榎沢さんを見ている、というのです。結局屋根には登らず降りてきたあと部屋の中にはいつ「自らトランポリンに乗って、私を直視し、両手を差し出してトランポリンに乗るように誘った」とあります。

M 笑い合いながらトランポリンを跳んだ、子どもと大人の喜びは目に見えるようですね。

F これは私の考えですが、トランポリンというのは上昇と落下の遊びです。落下を恐れて緊張した子どもと大人が、関係を回復するのに最適な遊びだったと思いますよ。

### 大人が保育者になること

M いっしょにトランポリンを跳び合うことで、緊張関係にあった二人が柔らかないい関係になる。誘ったのが子どもからだということも興味深いですね。子どもに誘われたことよって『大人が保育者になる』ということとは示唆に富むことだと思います。子どもが高いところの憧れをもつことの反面に、高いところに登ると落ちる危険性も出てきます。その両面を共有する大人がいなければ、どこでも子どもの内面は豊かな成長をなし遂げることは出来ないと感じました。そして大人も管理者や監督者でしかないものになってしまつて、人間社会がますます潤いのないものになるでしょう。